

算数が好きになる、指導をしましょう。

石井康雄（前船橋市立金杉台小学校 校長）

Q

1年生「わくわくがっこう」で、算数を好きにさせるよい方法とは、何でしょうか？

A

P 4からP 9までは、絵本のように見える中に、算数を好きになる要素がたくさん載っていて、幼児期から児童への懸け橋になる指導ができます。幼稚園や保育園では、日常生活の中で、数量や図形などに関心を持つという指導が定められています。そして、学校説明会の「入学前のしおり」には、入学までに10までの数が数えられると書かれていますので、一斉指導では、数を数えたり、数に当てはまる絵を選んだりさせましょう。

初めに、数を数えさせていきます。数えるために、「くるま、さくら、はと」と発問し、教科書に指を置かせましょう。そして、挿絵の子供たちが何をしようとしているのかを考えさせ、「車は何台ありますか。」と始めていきます。逆の「6匹いるのは何ですか。」という質問もしていきましょう。答えを発表させたり、鉛筆で囲ませたりすることもできます。子供たちが出会っていく順に、ストーリー化することもできます。好きにさせるために、質問とその答えの予想をたくさん用意しておきましょう。

P 6は、1対1対応の学習です。鳥やミツバチが、このあとどうなっていくか、先生が尋ねています。「小鳥は切り株にとまれるかな。」「カエルは、みんなハスの葉に乗れるかな。」という質問です。この時に、「どうして全部のれるのかな。」「ハスの葉には、あと何匹乗れるかな。」と言った、比べてみた結果の理由を聞いてみるすることができます。その後、正しいかどうかを線で結んで確認しようという、学習問題的な発問が出るようになります。こうした指導により、算数を好きにさせましょう。

P 8からは、数図ブロックが出てきます。まず、バケツとじょうろを上下に区別しておかせましょう。そして、数図ブロックを双方の上に置かせます。また、うさぎや鳥が何をしようとしているのかを考えさせ、数図ブロックを置かせ、ケースに入れさせます。そうすることで、数えやすくなり、違いもわかります。このように、今の能力の少し高いところに焦点を当て、解決したときの楽しさを学習させましょう。

先生方が行う教材研究の楽しさは、上記のような指導法を考える点にあります。



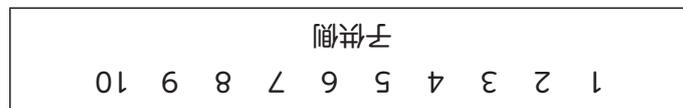
1年生「かずとすうじ」では、1から10まで知っている子供に対し、どのような指導をしたらよいのでしょうか？



ここで、初めて数詞が出てきますが、ほとんどの子は1から10までの数字を知っています。したがって、指導事項を学年で共通理解することが大切です。

子供たちに、教科書を見ながら、同じ数の物を探させたり、それをブロックで表させたりして、数を唱えさせましょう。これは、具体物と半具体物（ブロック）と数字を結びつける指導です。そして、同じこと（同じ質問）を何度も繰り返して指導し、表現させましょう。毎時間、多くの子供たちに発表させる機会を与えます。また、黒板を使って発表させる工夫をしましょう。こうした「学び方」を学ばせることが、この時期の子供たちにとって最も重要です。この他、10までの数をたくさん用意したり、10個のものから指定した数だけ出させたりするのもいいでしょう。

一方、数字の正しい書き方の指導も重要です。特に、5や0の書き方は、しっかり指導しましょう。子供と一対一になり、書き方を逆さ数字で師範できたらよいと思います。逆さ数字は練習すれば書けるようになりますので、お勧めです。



教師側（子供と向かい合い、逆に書いていく）

次に、5までの数の合成・分解の指導をします。例えば、「4はいくつといくつ」「いくつといくつで4」です。気をつけたいのは、「0個と5個の組み合わせはさせない」ことです。

「10までの数」において、「1から5までのかず」と「6から10までのかず」の教科書の紙面を比較すると、流れが似ていますが、「6から10までのかず」では、左側に「5」の場面が示されています。これは、5を基にして、それぞれ「5よりいくつ増えたか」を意識させるためです。このスパイラル的な指導により、同じ学びを繰り返していけば、算数を好きにさせることができます。

また、「ならべよう」「いってみよう」「くらべよう」「かぞえよう」は子供同士の学びとして、数学的な活動を好きにさせる学習になっています。ペア・グループで行わせましょう。

